平成３０年２月１７日

万富東大寺瓦窯跡と宋風石獅子

岡本芳明

【講座の概要】

治承四年 (1180) 十二月、「源平の戦い」で焼失した東大寺は、大勧進 (東大寺復興の責任者) となった俊乗房重源により、朝廷や鎌倉幕府などの支援を得て復興再建された。東大寺復興のために別所や造営料国が設置され、大仏の修理は宋の技術者陳和卿を起用し、大仏殿は大仏様 (天竺様) と呼ばれる新しい建築様式が採用されている。大仏殿などに安置された彫像や仏像の製作には、宋の石工や慶派と呼ばれる南都仏師が起用された。それらによって生み出された文化芸術は、鎌倉時代の新文化の創生に大きく貢献している。

東大寺南大門北側に安置される石獅子一対は、建久七年 (1196) に「宋人字六郎」ら 4 人の石工により制作されたもので (『東大寺造立供養記』建久七年条)、背中を立てて起座する姿で、胸飾りや台座の意匠などから中国宋代の特色をもつ。

万富東大寺瓦窯跡から北東約 1.2km の吉井川に面して鎮座するひ爪神社・熊野神社には、東大寺石獅子とは座する姿は異なるものの、胸飾り、子獅子や毬と戯れる様など宋様式の特色をもつ石獅子が存在する。この石獅子は、東大寺瓦輸送の安全を祈念して奉納されたものといわれているが、宋風石獅子の作例比較から類似した飯盛神社の石獅子が 14 世紀のものと考えられており、重源による鎌倉期東大寺再建よりは新しい作風と指摘される。

●万富東大寺瓦窯跡（岡山市東区瀬戸町万富）

鎌倉時代初めの東大寺再建瓦を製造した窯跡。14 基の瓦窯や操業当時の礎石建物跡、工房跡などが確認されている。瓦は、大仏殿のみではなく中門や回廊、南大門、鐘楼にも使用されており、30 ～ 40 万枚の瓦が生産され大規模に組織的に瓦製作が行われていた。備前国は、東大寺復興のため建久四年（1193）に東大寺造営料国となり、吉井川の水運が利用できること、焼き物の生産が盛んであったことから、この地が東大寺瓦の生産地に選ばれたものと考えられている。東大寺瓦窯操業以後、13 世紀前半から 14 世紀前半に生活雑器を生産した土器窯が操業されている。

○ひ爪神社（岡山市東区瀬戸町万富）・熊野神社（赤磐市徳富）

吉井川に面した大盛山東裾急斜面に位置する。かつては西に山を越えた保木松尾にあり、元禄の頃に廃社となる心配から人里遠き現在の地に移されたといわれる。もとは一社で一対の石獅子を所有していたのであろうが、ある時期に二社に分離してからは年ごとに入れ替えながら各一体を所有していたようである。現在、子獅子と戯れている一体は熊野神社所有で岡山県立博物館に寄託されており、毬と遊んでいるもう一体は不明である。

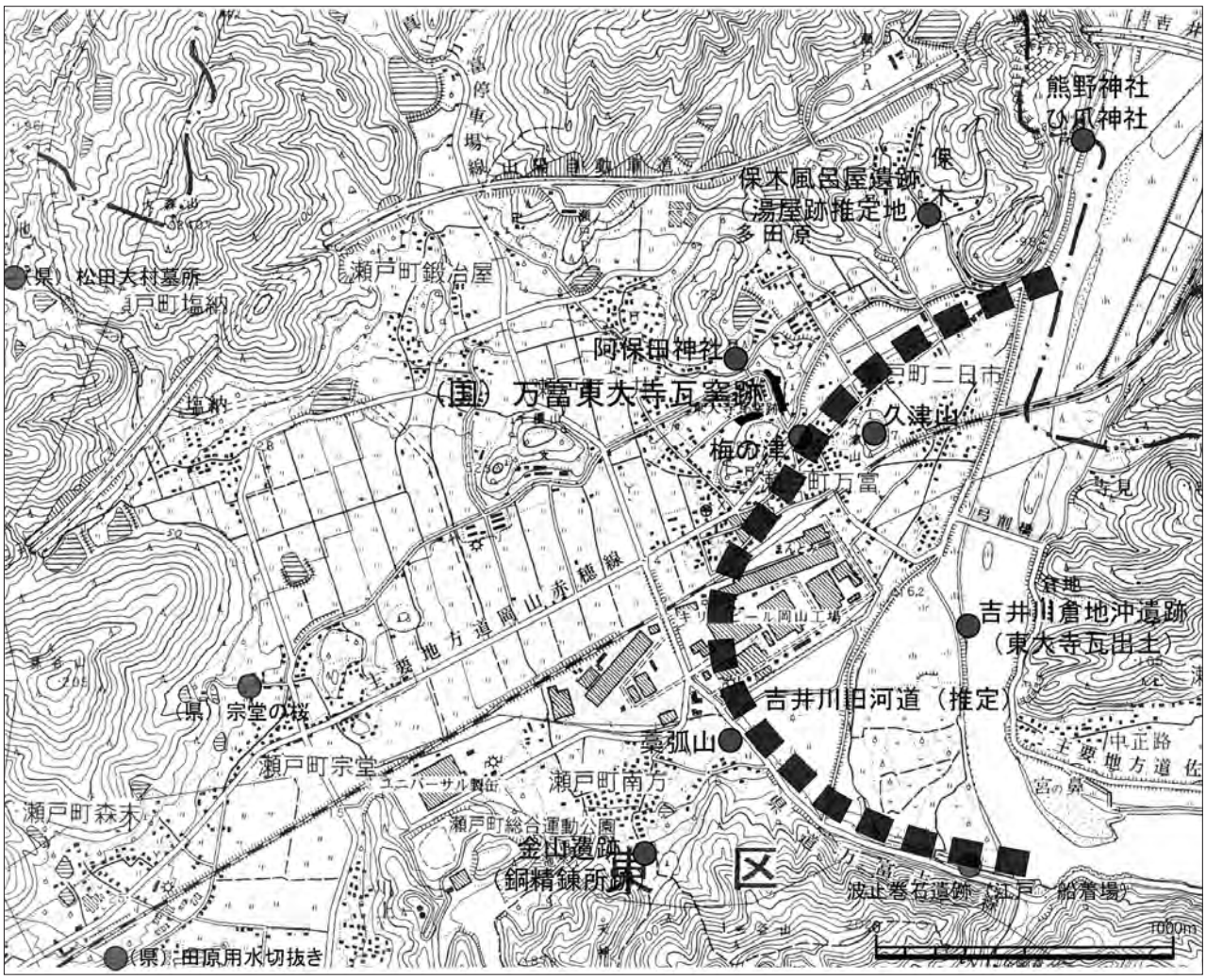
○笠神の文字岩（高梁市備中町平川）

高梁川支流成羽川の笠神の瀬にある、鎌倉時代に船路開削を物語る徳治二年 (1307) 銘の記念碑。現在は新成羽ダム建設により湖水面下にある。国史跡。石工の頭領は、東大寺再建にあたり宋から招かれた伊派一族の伊行経。伊行経は、同時期に備中域で石塔の造立などを行っている。

【交通】万富東大寺瓦窯跡：JR 山陽本線「万富駅」から北東へ約 400m

【引用・参考文献】

荒木誠一 1924『太田吉岡村誌』岡山県赤磐郡大田村・吉岡村立千種尋常高等小学校組合 (図３）
荒木誠一 1940『改修赤磐郡誌』岡山県赤磐郡教育会　矢部秋夫：編 1985『瀬戸町誌』瀬戸町
井形進 2005「宗像大社の宋風獅子とその周辺」『佛教藝術 283』毎日新聞社 (図４）
井形進 2008「山の神仏と海」『九州の中世学 - 交易・開発・信仰 - 予稿集』七隈史学会
岡本寛久 1980『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』岡山県教育委員会
岡本芳明・西村康・白石純 2003『史跡万富東大寺瓦窯跡確認調査報告』瀬戸町教育委員会
山川均：編 2012『寧波と宋風石造文化』東アジア海域叢書 10 汲古書院
『大勧進重源』図録 奈良国立博物館 2006(図２）『東大寺のすべて』朝日新聞社 2002
『岡山県の文化財（一)』1980 岡山県教育委員会



第１図　万富東大寺瓦窯跡と周辺遺跡

第２図　東大寺石獅子

第３図　熊野神社石獅子

第４図　飯盛神社石獅子